

18. キャベツ

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	(銅水和剤) Zボルドー	散布	-	-	
	ドイツボルドーA	散布	-	-	野菜類
P1	アクティガード顆粒水和剤	灌注	定植前日～定植当日	1回	
41+25	アグリマイシン-100	散布	収穫14日前まで	2回以内	
25	アグレプト水和剤	散布	収穫14日前まで	2回以内	
7	アフエットフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
11	アミスター20フロアブル	散布	収穫7日前まで	4回以内	
P2	オリゼメート顆粒水和剤	灌注	定植時	1回	
21	オラクル粉剤	全面土壌混和	定植前	2回以内	
24+U18	カスミンバリダシン液剤	散布	収穫7日前まで	4回以内	
24 + M1	(カスガマイシン・銅) カスミンボルドー 銅カッパーシン水和剤	散布	収穫7日前まで	4回以内	
31+24	カセット水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
M1+M5	シトラノフロアブル	散布	収穫14日前まで	2回以内	
31	スターナ水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
12	セイビアーフロアブル20	散布	収穫前日まで	3回以内	
M5	ダコソイル	作条及び全面施用土壌混和	は種又は定植前	1回	
M5	ダコニール1000	散布	収穫14日前まで	2回以内	
36	ネビジン粉剤	全面土壌混和	は種又は定植前	2回以内	
36+7	ネビモン粉剤	全面土壌混和	定植前	2回以内	
U18	バリダシン液剤5	散布	収穫7日前まで	5回以内	
7	パレード20フロアブル	灌注	育苗期後半～定植当日	1回	
U17	ピシロックフロアブル	散布	収穫前日	3回以内	
29	フロンサイド粉剤	全面土壌混和	は種又は定植前	2回以内(但し、苗床では1回以内、本圃では1回以内)	
29	フロンサイドSC	全面土壌散布	定植前	1回	2回以内(但し、苗床では1回以内、本圃では1回以内)
		全面散布土壌混和	は種又は定植前		
1	ベンレート水和剤	散布	収穫7日前まで	6回以内	
19	ポリオキシAL水溶剤	10分間種子浸漬	は種前	1回	
		灌注	は種覆土後 子葉展開期以降	1回 2回以内	
NC	マスタピース水和剤	散布	収穫前日まで	-	
M3	(マンゼブ) ジマンダイセン水和剤	散布	収穫30日前まで	3回以内	
	ペンコゼブ水和剤	散布	収穫30日前まで	3回以内	
7	モンカットフロアブル40	散布	収穫7日前まで	3回以内	
M1	ヨネポン水和剤	散布	収穫7日前まで	5回以内	
21	ランマンフロアブル	灌注	定植前日～当日	1回	
		散布	収穫3日前まで	4回以内	
2	ロブラール水和剤	散布	収穫7日前まで	4回以内	

・殺菌剤(参考農薬)

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	(銅水和剤) コサイド3000	散布	-	-	野菜類
4+M5	フォリオゴールド	散布	収穫14日前まで	2回以内	

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
15	アタブロン乳剤	散布	収穫7日前まで	4回以内	
4	アドマイヤーフロアブル	散布	収穫7日前まで	2回以内	
6	アニキ乳剤	散布	収穫3日前まで	3回以内	
	アフーム乳剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
4	(ジノテフラン) アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	灌注	定植前日～定植時	1回	
29	ウララDF	散布	収穫前日まで	2回以内	
11	エスマルクDF	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	-	野菜類
1	(アセフェート) オルトラン水和剤	散布	収穫30日前まで	1回	
	オルトラン粒剤	植穴処理	定植時	1回	
	ジェイエース水溶剤	散布	収穫30日前まで	1回	
	ジェイエース粒剤	植穴処理	定植時	1回	
4+5	ガードナーフロアブル	灌注	定植3日前～定植当日	1回	
15	カスケード乳剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	
30	グレースシア乳剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	
13	コテツフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	コナガコンープラス (ロープ状製剤)	支柱を立てロープ状の製剤を対象作物の上部に張り渡す。	対象作物の栽培全期間	-	コカガ、オオカガが加害する農作物等
	コナガコンープラス (ツインチューブ製剤)	作物の生育に支障のない高さに支持棒等を立て支持棒にディスプレイを巻き付け固定し圃場に配置する。	対象作物の栽培全期間	-	コカガ、オオカガ、ヨウカガが加害する農作物等
	コンフューザーV	作物の生育に支障のない高さに支持棒等を立て支持棒にディスプレイを巻き付け固定し圃場に配置する。	対象作物の栽培全期間	-	野菜類
1	サイアノックス乳剤	散布	収穫21日前まで	2回以内	
3	サイハロン水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
11	サブリーナフロアブル	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	-	野菜類(はくさい、えごま(葉)を除く)
28+4	ジュリボフロアブル	灌注	育苗期後半～定植当日	1回	
3	スカウトフロアブル	散布	収穫前日まで	5回以内	
5	スピノエース顆粒水和剤	散布	収穫3日前まで	3回以内	
11	ゼンターリ顆粒水和剤	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	-	
1	ダイアジノン水和剤34	散布	収穫30日前まで	2回以内	
1	ダイアジノン粒剤3	土壌混和	収穫30日前まで	2回以内	
5	ディアナSC	散布	収穫前日まで	2回以内	

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
11	トアローフロアブルCT	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	-	野菜類
11	トアロー水和剤CT	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	-	野菜類(パセリ、えごま(葉)を除く)
1	トクチオン乳剤	散布	収穫21日前まで	2回以内	
4	トランスフォームフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
22	トルネードエースDF	散布	収穫7日前まで	2回以内	
15	ノーモルト乳剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	
3+1	ハクサップ水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
21	ハチハチ乳剤	散布	収穫14日前まで	2回以内	
11	バシレックス水和剤	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	-	野菜類
14	パダンSG水溶剤	散布	収穫14日前まで	4回以内	
28	フェニックス顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
UN	プレオフロアブル	散布	収穫7日前まで	2回以内	
28	プレバソンフロアブル5	灌注	育苗期後半～定植当日	1回	
		散布	収穫前日まで	3回以内	
30	ブロフレアSC	散布	収穫前日まで	3回以内	
3	ペイオフME液剤	散布	収穫7日前まで	4回以内	
21	マイトクリーン	散布	収穫7日前まで	4回以内	
4	モスピラン粒剤	植穴土壌混和	定植前日～定植当日	1回	
		株元散布	定植時		
	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫7日前まで	5回以内	
1	ランネート45DF	散布	収穫14日前まで	3回以内	
14	リーフガード顆粒水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	

・殺虫剤(参考農薬)

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
6+15	アフームエクセラ顆粒水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
9	コルト顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
23	モベントフロアブル	散布	収穫7日前まで	3回以内	

- 注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。
- 注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける(「薬剤抵抗性管理」参照)。
- 注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。
- 注4) 蚕毒・魚毒については、「56. 野菜類の総括注意」も参照する。

病害虫名 (F : 菌類病、B : 細菌病、V : ウイルス病、O : その他の病原体)

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
苗立枯病 (F)	は 種 前	1. 無病床土、培土を用いる。 2. 育苗用トレイを消毒する。	
萎 黄 病 (F)	は 種 前	1. 抵抗性品種を採用する。 2. 無病の床土、培土を用いる。薬剤で消毒する場合は、土壌消毒の項を参照し、登録薬剤を用いる。	1. 種子は無病のものを用いる。 2. 収穫後の被害株は、根ごと掘り出し完全に処分する。 3. 高温期に発病しやすい(夏取りに多発する)。
	生 育 期 間	1. 発病株は直ちに抜き取り、ほ場外に埋却する。	
根こぶ病 (F)	は 種 期 及 び 定 植 期	1. 抵抗性品種を採用する。 2. 発病根は、集めて埋却する。 3. 土壌酸度を pH7 以上になるように、石灰を施用する。 4. は種、又は定植前に 10a 当り、ネビジン粉剤 20~30kg、フロンサイド粉剤、ダコソイル 30~40kg のいずれかを全面に均一に散布し、土壌とよく混和する。 5. 定植前に 10a 当り、オラクル粉剤またはネビモン粉剤 30kg を全面に均一散布し、土壌とよく混和する。 6. 定植前にフロンサイド SC を 10a 当り 500ml を 100~200ℓ の水で希釈し、全面散布後、土壌混和する。 7. 定植前日~当日にセル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊当りランマンフロアブル 500 倍液を 2ℓ 灌注する。	1. 排水の悪いほ場に発生しやすい。 2. フロンサイド、ネビジン、ネビモンは、面積に応じた薬剤量を厳守する。 3. ネビモンは、蚕毒及び魚毒に注意する。 4. オラクルは魚毒に特に注意する(特別指導事項参照) 。 5. フロンサイドは魚毒に注意する。 6. フロンサイドは無風条件で散布する。 7. ランマンの育苗トレイへの灌注処理は、薬液が培土に充分浸透するように、ていねいに処理する。
黒すす病 (F)	は 種 前 ~ 育 苗 期	1. ポリオキシリン AL 水溶剤のは種前 20 倍液 10 分間種子浸漬処理、セル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊当り、は種覆土後 1,000 倍液の 500ml 灌注処理、又は子葉展開期以降 2,500 倍液の 500ml 灌注処理のいずれかを行う。	1. 子葉展開期以降の灌注処理は、早期の処理(本葉展開直前)が望ましい。
べ と 病 (F)	生 育 全 期 間	1. マンゼブ(ジマンダイセン、ペンコゼブ)水和剤 600 倍液、ダコニール 1000、ピシロックフロアブル 1,000 倍液、ランマンフロアブル 2,000 倍液のいずれかを十分散布する。	1. 夏まきキャベツは、苗床で発生が多い。 2. 同一系統薬剤は連用しないで、他系統の剤とローテーション散布する。
ピシウム腐敗病 (F)	生 育 期 間	[参考農薬] 1. フォリオゴールド 1,000 倍液を散布する。	1. 防除時期は定植直後からである。 2. ほ場が過湿になる場合は、排水を図る。
菌 核 病 (F)	育苗期後半~定植当日	1. パレード 20 フロアブル 100 倍液をセル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊当り 500 ml 灌注する。	1. 低温多雨の時に発病が多い。 2. 多発地帯では連作しない。
	結球始めより収穫期まで	1. ロブラール水和剤 1,000 倍液、又はペンレート水和剤 2,000 倍液を散布する。	
株 腐 病 (F)	定 植 前	1. フロンサイド SC を定植前に 10a 当たり原液 500 ml を 150~200ℓ に希釈して全面土壌散布する。 2. 定植前にネビモン粉剤を 10a 当り 30kg 全面に均一散布し、土壌と良く混和する。	1. バリダシンは、黒腐病との同時防除を兼ねて予防散布する。 2. 株元によく薬液がかかるようにする。 3. バリダシンの薬害、薬効の注意は黒腐病を参照する。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
株 腐 病 (F)	結球始めより 収穫期まで	1. バリダシン液剤5の800倍液、セイビアーフロアブル20、ロブラール水和剤の1,000倍液、アフエットフロアブル、アミスター20フロアブル、モンカットフロアブル40の2,000倍液のいずれかを散布する。	4. ネビモンは蚕毒及び魚毒に、フロンサイドは魚毒に注意する。 5. ネビモンは生育期散布剤との体系防除が望ましい。 6. フロンサイドは無風条件で散布する。 7. QoI 剤に関する注意事項(56. 野菜類の総括注意) 参照。 8. 同一系統薬剤は連用しないで、他系統の剤とローテーション散布する。
黒斑細菌病 (B)	定 植 時	1. オリゼメート顆粒水和剤 100 倍液又は、アクティガード顆粒水和剤 5,000 倍液をセル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊当り 500 ml 灌注する。	1. 品種の感受性差が大きい。できるだけ抵抗性を有する品種を利用する。 2. 降雨で発病が助長される。定植から1ヶ月程度が重点防除時期である。 3. アクティガードは培土が極度に乾燥している場合、薬害を生じる恐れがあるので、薬剤処理前に適度に灌水する。 4. 無機銅剤は高温条件下、連続散布で薬害を生じる恐れがあるので、特に注意する。 5. アグリマイシンは、高温時の散布や連用すると薬害(クロロシス)を生じやすいので注意する。 6. アグリマイシンは、アルカリ性農薬(ボルドー液)との混用を避ける(薬効の低下、薬害)。 7. マスタピースは生物農薬である(「56. 野菜類の総括注意」参照)。 8. 生育初期から結球始期までは無機銅剤を、結球始期以降はマスタピースを散布することで効果的に防除できる。 9. 本病の発生生態および防除に関しては、長野県農業関係試験場、病害虫データベースで公開されている「アブラナ科野菜の黒斑細菌病防除指針(ver. 2)」(https://www.agries-nagano.jp/wp/wp-content/uploads/2023/03/manualv2-.pdf) を参照する。
	生育初期から 収 穫 期	1. (1)～(3)の薬剤のいずれかを定植後から予防散布する。 (1)銅剤：ドイツボルドーA、又はZボルドーの500倍液。 (2)抗生物質剤及びその混合剤：カスガマイシン・銅(カスミンボルドー、カップーシン)水和剤1,000倍液、アグリマイシン-100の2,000倍液。 (3)オキシリニック酸剤及びその混合剤：カセット水和剤、スターナ水和剤の1,000倍液。 2. マスタピース水和剤1,000倍液を散布する。	

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
黒 腐 病 (B)	定 植 時	1. オリゼメート顆粒水和剤 100 倍液をセル成型育苗トレイ 1 枚当たり 500mlの割合で灌注する。	1. 本剤の防除効果が認められるのは定植から 1 ヶ月程度である。そのため、生育後半に罹病の恐れがある場合は、散布剤による防除を行う。 2. 薬剤が流亡する恐れがあるため、薬剤処理直前及び直後の灌水は避ける。
	結球始めより 収穫期まで	1. (1)～(3)の薬剤のいずれかを定植後から予防散布する。 (1)銅剤及びその混合剤：Zボルドー、ドイツボルドーA、ヨネポン水和剤の 500 倍液、シトラノフロアブル 1,200 倍液。 (2)抗生物質剤及びその混合剤：バリダシン液剤 5 の 800 倍液、カスガマイシン・銅（カスミンボルドー、カッパーシン）水和剤 1,000 倍液、アグリマイシン-100、アグレプト水和剤の 2,000 倍液。 (3)オキシロニック酸剤及びその混合剤：カセット水和剤 1,000 倍液。 [参考農薬] 1. コサイド3000の 2,000 倍液を散布する。	1. 多発ほ場では2～3年、アブラナ科野菜を連作しない。 2. 過湿、過乾、高温期栽培、肥切れのものに出やすい。 3. 常発ほ場では、発病前から予防散布を実施する。 4. バリダシンは、きく（秀芳の力）に葉害が出るので、かからないようにする。 5. アグレプト、アグリマイシンは、高温時の散布や連用すると葉害（クロロシス）を生じやすいので注意する。 6. アグレプト、アグリマイシンは、アルカリ性農薬（ボルドー液）との混用は避ける（薬効の低下、葉害）。 7. 無機銅剤は高温条件下、連続散布で葉害が発生する恐れがあるので特に注意する。
軟 腐 病 (B)	本葉 10 葉期 以降	1. ドイツボルドーA、Zボルドーの 500 倍液、カスミンバリダシン液剤 800 倍液、スターナ水和剤 1,000 倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. コサイド3000の 2,000 倍液を散布する。	1. 多発地、常発地では、予防散布に心がける。 2. 発病後の散布は効果が劣る。 3. カスミンバリダシンはアルカリ性薬剤との混用は避ける。また、杉（特に苗木）、れんこん、大豆、きく（秀芳の力等）、トマトには葉害を生じるおそれがあるのでかからないようにする。 4. 無機銅剤は高温条件下、連続散布で葉害が発生する恐れがあるので特に注意する。
コ ナ ガ タ マ ナ ギ ン ウ フ バ ヨ ト ウ ガ ア オ ム シ	育苗期から 収穫まで	1. 別表により、いずれかの薬剤を散布する。	1. 加害初期に防除する。
コ ナ ガ ア オ ム シ	定 植 時	1. アセフェート（オルトラン、ジェイエース）粒剤を株当たり 1～2 g 植穴処理する。 2. モスピラン粒剤を 1 株当たり 1 g 植穴土壌混和する。 3. ガードナーフロアブル、プレバソンフロアブル 5 の 100 倍液、ジュリボフロアブル 200 倍液のいずれかをセル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊当たり 500ml 灌注する。	1. ガードナー、プレバソン、ジュリボは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 2. プレバソン、ジュリボは水産動物（甲殻類）に影響が強いのて注意する。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
ヨトウガ	定植時	1. アセフェート（オルトラン、ジェイエース）粒剤を株当たり1～2g植穴処理する。 2. プレバソフロアブル5の100倍液またはジュリボフロアブル200倍液をセル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊当たり500ml灌注する。	1. プレバソン、ジュリボは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 2. プレバソン、ジュリボは水産動物（甲殻類）に影響が強いので注意する。
アオムシ ウワバ類 オオタバコガ	生育期間	[参考農薬] 1. ディアナSC5,000倍液を散布する	1. ディアナは蚕毒に特に注意する。（特別指導事項参照）
コナガ	定植時	1. ジノテフラン（アルバリン、スタークル）顆粒水溶剤50～100倍液をセル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊当たり500ml灌注する。	1. 処理直前、直後の灌水は効果を減ずることがあるので避ける。
	生育期間	1. コナガコン-プラス（ロープ状製剤）を10aに20m、支柱を用いてキャベツの上に設置する。 2. コナガコン-プラス（ツインチューブ製剤）を長さ50～60cm程度の棒の端に2本を留めたものを1セットとし、10a当り50セットを4m×5m間隔格子状には場内へ均等に配置する。	1. コナガの発生初期から、3ha以上の面積で共同使用する。 2. コナガ以外ではオオタバコガとヨトウガに交信かく乱効果がある。対象外害虫の発生が認められたら殺虫剤で防除する。 3. コナガの密度が高まったら、殺虫剤を散布する。
コナガ オオタバコガ タマナギン ウワバ	生育期間	1. コンフューザーVを長さ50～60cm程度の棒の端に4本留めたものを1セットとし、10a当り25セットを6m×7m間隔格子状には場内へ均等に配置する。	1. コナガ対象の場合、発生初期（概ね4月下旬頃）に設置する。 2. オオタバコガ対象の場合、第1世代成虫発生初期（概ね7月上旬～中旬頃）に設置する。 3. タマナギンウワバ対象の場合、越冬世代成虫発生期（概ね4月下旬頃）に設置する。 4. 3ha以上の面積で共同利用する。 5. 本剤の対象害虫はオオタバコガ、タマナギンウワバ、イラクサギンウワバ、ヨトウガ、シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ、コナガであり、これら以外の害虫には効果がない。 6. 多発時は殺虫剤を散布する。
ネキリムシ （カブラヤガ）	定植時	1. ダイアジノン粒剤3を10aに6～9kgを植付前に散布し、土壌混和する。	1. ダイアジノンは魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
アザミウマ類	生育期間	[参考農薬] 1. ディアナSC2,500倍液を散布する。	1. ディアナは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
アブラムシ類	定 植 時	1. モスピラン粒剤を株当り 1 g 植穴土壌混和又は株元散布する。 2. ガードナーフロアブル 100 倍液、ジノテフラン(アルバリン、スタークル)顆粒水溶剤 50~100 倍液、ジュリボフロアブル 200 倍液のいずれかをセル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊当り 500ml 灌注する。	1. 処理直前、直後の灌水は効果を減ずることがあるので避ける。 2. ガードナー、ジュリボは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 3. ジュリボは水産動物(甲殻類)に影響があるので注意する。
	生 育 期 間	1. サイアノックス乳剤、ハチハチ乳剤の 1,000 倍液、パダン S G 水溶剤 1,500 倍液、ウララ D F、ダイアジノン水和剤 3 4、トランスフォームフロアブル、モスピラン顆粒水溶剤の 2,000 倍液、アドマイヤーフロアブル 4,000 倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. モベントフロアブル 2,000 倍液を散布する。	1. ハチハチ、パダンは蚕毒及び魚毒に、アドマイヤー、モスピランは蚕毒に、ダイアジノンは魚毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 2. トランスフォーム、モベントは蚕毒に注意する。 3. モベントは水産動物(甲殻類)に影響があるので注意する。 4. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稻にかからないよう注意する。
アブラムシ類 ネギアザミウマ	生 育 期 間	[参考農薬] 1. コルト顆粒水和剤 3,000 倍液を散布する。	1. コルトは水産動物(甲殻類)に影響があるので注意する。

【別表】 殺虫剤の使用方法及び効果(表中の登録内容は令和 5 年 11 月 30 日現在)

薬剤の系統	I R A C コ ド	薬 剤 名	希釈倍数、施薬量	コ ナ ガ	タ マ ナ ギ ン ウ ワ バ	ヨ ト ウ ガ 1	ア オ ム シ	ア ブ ラ ム シ 類	ネ ギ ア ザ ミ ウ マ
合成ピレスロイド剤	3 3+1	サイハロン水和剤	2,000 倍	△*	○*	○*	○*	○*	
		スカウトフロアブル	2,000	△*	○	○*	○*	○*	
		ペイオフ M E 液剤	1,000	△*		○*	○*	○*	
		ハクサップ水和剤	1,000	△*	○	○	○	○*	
ネライストキシン剤	14	リーフガード顆粒水和剤	1,500	△*			○	○	○ ³⁾
		パダン S G 水溶剤	1,500	△*			○*	○*	
B T 剤	11	エスマルク D F	2,000	○*			○		
		サブリーナフロアブル	1,000	○*		○	○		
		ゼンターリ顆粒水和剤	2,000	○*		○	○*		
		トアロー水和剤 C T	1,000	○*		○*	○		
		トアローフロアブル C T	1,000	○*			○		
		バシレックス水和剤	1,000	○*	○		○		
有機リン剤	1	アセフェート							
		〔オルトラン水和剤	1,500	△*	○*	○*	○*	○	
		〔ジェイエース水溶剤	1,500	△*	○*	○*	○*	○	
		〔オルトラン粒剤	3~6kg/10a(1~2g/株)	○*		○*	○*	○*	
		〔ジェイエース粒剤	3~6kg/10a(1~2g/株)	○*		○*	○*	○*	
		サイアノックス乳剤	1,000	△*	○	○	○	○*	
		ダイアジノン水和剤 3 4	2,000	△*				○*	
		トクチオン乳剤	1,000	△*	○*2)	○*	○*	○	

薬剤の系統	I R A C コ ド	薬 剤 名	希釈倍数、施薬量	コ ナ ガ	タ マ ナ ギ ン ウ ワ バ	ヨ ト ウ ガ 1)	ア オ ム シ	ア ブ ラ ム シ 類	ネ ギ ア ザ ミ ウ マ
カーバメート剤	1	ランネット45DF	1,000	△*	○*	○*	○*	○	
昆虫発育阻害 剤 (IGR)	15	アタブロン乳剤	2,000	△*	○*	○*	○*		
		カスケード乳剤	4,000	△*	○	○	○		○3)
		ノーマルト乳剤	2,000	△*	○	○	○		
ネオニコチ ノイド剤	4	アドマイヤーフロアブル	4,000					○*	
		ジノテフラン(アルバリン、 スタークル)顆粒水溶剤	50~100倍灌注 (セル成型育苗トレイ1 箱またはペーパーポッ ト1冊当り500ml)	○*			○	○*	
		モスピラン粒剤	1g/株	○*			○	○*	
		モスピラン顆粒水溶剤	2,000	△*			○	○*	○3)
スルホキシ イミン剤	4	トランスフォームフロアブル	2,000				○*	○	
スピノシン剤	4+5	ガードナーフロアブル	100倍灌注(セル成型育 苗トレイ1箱またはペ ーパーポット1冊当り 500ml)	○*			○	○*	○3)
		スピノエース顆粒水和剤	5,000	○*	○	○	○*		○3)
	5	ディアナSC	5,000 2,500	○* ○	○2) ○2)	○ ○	○ ○		○3) ○3) ○3)
ミルベマイシ ン系	6	アニキ乳剤 アフーム乳剤	2,000 2,000	○* ○*	○2) ○*	○	○ ○*		
	6+15	アフームエクセラ顆粒水和剤	1,500	○	○	○	○		
ピリジンアゾ メチン誘導体 およびピロペ ン系	9	コルト顆粒水和剤	3,000					○	○
テトロン酸お よびテトラミ ン酸誘導体	23	モベントフロアブル	2,000	○			○	○	△3)

薬剤の系統	IRACコード	薬剤名	希釈倍数、施薬量	コナガ	タマナギンウワバ	ヨトウガ ¹⁾	アオムシ	アブラムシ類	ネギアザミウマ
ジアミド剤 ^{注7)}	28+4	ジュリボフロアブル	200倍灌注(セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊当たり500ml)	△*		○	○*	○*	○
	28	フェニックス顆粒水和剤	2,000	△*	○2)	○	○		
		プレバソンフロアブル5	100倍灌注(セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊当たり500ml) 2,000	△*	○2)	○	○*		
イツオキサゾリン剤	30	グレースシア乳剤	3,000	○*	○2)	○	○*		○
メタジアミド系		プロフレアSC	2,000	○	○*	○	○		
その他	29	ウララDF	2,000					○*	
	13	コテツフロアブル	2,000	○*	○	○	○		
	22	トルネードエースDF	2,000	○*	○2)	○	○		
	21	ハチハチ乳剤	1,000	○*			○	○*	○3)
	UN	プレオフロアブル	1,000	○*	○2)	○	○		○
	21	マイトクリーン	1,000	○*					

【効果凡例】○*：効果ある（対象害虫に普及済み）、○：効果ある（対象害虫に未普及）、△：効果劣る

1)：ヨトウガは、農薬適用害虫名のヨトウガ、ヨトウムシを含む。

2)：登録はウワバ類。

3)：登録はアザミウマ類。

4)：薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

【注】

1. トクチオンは、トマト、メロン等にかかるると特異的に臭いが残るので、他作物にかからないよう注意する。

2. ヨトウムシの中、老令虫に対しては、ランネート1,000倍液を散布する。しかし、コナガに対する効果は低い。ランネートは吸入毒性が強いので、散布する時は必ずマスクを着用する他、風向きなどに注意し、噴霧を吸入しない。

3. 合成ピレスロイド剤、リーフガード、パダン、アニキ、アフアーム、アフアームエクセラ、ハチハチ、グレースシアは蚕毒及び魚毒に、BT生菌剤、IGR剤、ネオニコチノイド剤、ガードナー、スピノエース、ジュリボ、フェニックス、プレバソン、プレオ、プロフレア、モベント、ディアナは蚕毒に、ダイアジノン、コテツ、マイトクリーンは魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。

4. コルト、ジュリボ、フェニックス、プロフレア、プレバソン、モベントは水産動物(甲殻類)に影響があるので注意する。

5. コテツ、トアロー、トランスフォームは蚕毒に注意する。

6. 合成ピレスロイド剤抵抗性コナガの発生地帯では、合成ピレスロイド剤をコナガ防除に用いない。

7. ジアミド剤は、地域によってはコナガに対する感受性低下が認められるので注意する。

8. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稻にかからないよう注意する。